別紙様式２

校番	050	ホームルーム活動		生徒会活動		学校行事	○	高等学校用

平成 29 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校「特別活動の取組事例」

学校名	広島県立河内高等学校	校　長	西山　光人	生徒指導主事	川原　栄治

取 組 事 例 名	『全校写真コンテスト』

取　組　の　ね　ら　い『伝える力・受け取る力』

自分の気持ちを伝えることができ，人の気持ちを感じ取ることができれば，望ましい人間関係を築くことが容易になる。そのため『伝える力・受け取る力』を様々な機会を通じて育み，自分とは異なるものを受け入れ尊重する態度を養うことにより，よりよく生きる力を身につける。

身に付させたい資質・能力

・自分の考えや気持ちを，正確に伝えることができる。
・人の考えや気持ちを，正確に受け取ることができる。

取 組 の 具 体 的 内 容『表現する・感じる』

全校生徒一人一人がテーマに則して写真を撮影し，文化祭当日に展示する。校内選考委員会によって展示を見た人の反応も含めて評価して受賞作品を決め，文化祭閉会式において優秀作品の表彰を行う。

取組の課題・創意工夫『見る側を意識して表現する』

昨年度，写真家の石河真理（いしこまり）さんによる写真教室を各学年２回ずつ実施し，技術的な指導に加え，『伝えたいことを伝えるためにはどのような視点が必要か』を生徒に考えさせた。今年度も，１年生に対して同じような講習を行った上で，コンテストを行った。

コンテストの要項に，人を中傷するもの，いたずらやいじめにつながるもの，肖像権やプライバシーを侵害するものや他者の撮影したものを出品してはいけないという注意事項を記し，丁寧に説明した。

提出方法は，写真のデータが入ったメディアを学校へ持参する方法と，写真のデータをメールに添付して河内高校のアドレスに送る方法のどちらかとしたが，ほとんどの生徒はメールで提出した。

作品は２L 版に印刷しそれぞれを額に入れて，最も人通りの多いところにクラスごとにパネル展示した。表彰を行う際にはパワーポイントを用いて受賞作品をスクリーンに映し出して紹介した。

取組の成果（効果）『他者理解』

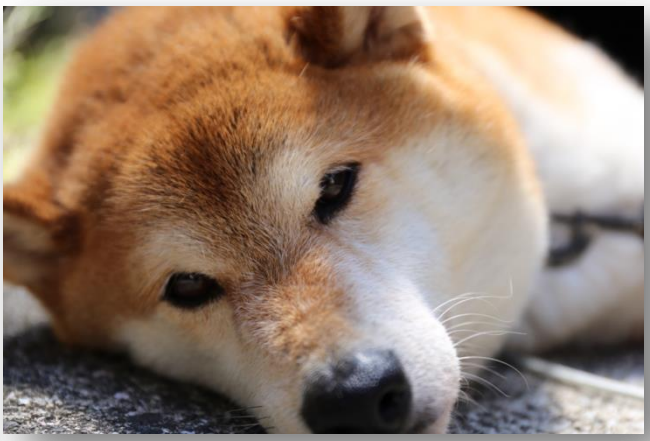
本校では特別支援の視点から，『生徒に伝わらないのは生徒の側の問題ではなく，伝わるように話せていないのではないか。』という基本認識に立ち「伝える」ことを意識して授業や指導を行っている。そして，できていることを認めてほめることや，否定的な表現を使わず，「〇〇すれば〇〇できる」といった肯定的な表現を使うなど多くのことを継続的に行っている。また，写真コンテストだけでなく写生大会（１年生）や短歌コンテストなど自己表現の場と表彰される機会を多く設け自己肯定感の醸成と，他者を認め，容認する心の育成へとつなげている。

そういった学校全体の取組が背景にあって，コンテストに出品された作品の中に，人を中傷するものやいたずらやいじめにつながるものなどは一切なかった。文化祭当日，展示された作品に関して，自分と異なる視点に驚く声や，称賛する声があちこちで聞かれた。トラブルを起こす生徒にありがちな，自分と異なるものを否定したり非難したりする姿は全く見られなかった。

生徒はこの取組を通じて，人の感性に触れることに喜びを感じたり，伝えることの難しさを実感したりすると共に，受け取る側が正しく受け取ってくれて初めて「伝わる」のだというコミュニケーションの基本的なことを実感することができたと思われる。

生徒指導部が実施している生活満足度アンケートにおいて，学校生活に満足しているかという問いに肯定的な回答をしている生徒の割合（１・２年生）は，H27 年度 70.8%　H28 年度 77.3%　H29 年度 80.0%と増加している。

大賞「海の太陽」



優秀賞「幸せ」

優秀賞「秋とカメラ」

今　後　の　展　開『主体的対話的な深い学びへ』

次回は，コンテスト終了後に良かったと思う作品とその理由をグループ内で話し合い，それぞれの感想を共有する時間を設けることにより，一層自分とは異なるものを受け入れ尊重する態度を養いたい。その際，押し付けがましさや胡散臭さを生徒が感じないように工夫する必要がある。

また，５回目を迎えた全校写真コンテストだが，実施時期や内容を生徒に決めさせるなど，生徒が主体的に行うコンテストへと深化させていく必要がある。

他校へのアドバイス『教職員の意識転換』

まずは教職員が「伝える」ことに関しての意識を変え，相手を意識して伝わるように話そうとしているという姿を見せ，できていないことを批判するのではなく，できていることを認めるという姿勢で生徒に接することが大切である。そういう雰囲気があって初めて個々の取組が効果的なものになり得る。